

令和 2 年 3 月 23 日現在

機関番号：35307

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02128

研究課題名(和文)近代日本における「群舞」の研究 - 榎茂都陸平を中心に -

研究課題名(英文) Research of "group dance" in Modern Japan - Focusing on Rikuhei Umemoto's choreography

研究代表者

桑原 和美 (KUWAHARA, KAZUMI)

就実大学・教育学部・教授

研究者番号：60341137

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大正期から昭和初期に、新舞踊の先駆的振付者として活躍した榎茂都陸平に注目し、彼の代表的な群舞作品の一つで1931年に宝塚少女歌劇とウィーンで上演された『ソナタ・アパッシヨナータ』について、榎茂都流舞踊家の協力を得てその舞踊譜を解読し、音楽を伴った再現演舞を実現した。それにより、舞踊の近代化を目指した新舞踊の重要な要素である「群舞」が、実際の作品上でどのように具現されていたのかを明らかにすることができた。

また時期の異なる他の群舞作品と比較することで、西洋の舞踊や身体運動文化の受容、社会情勢の変化が、舞踊技法や群舞表現に与えた影響についても検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

西洋文化を受容し、旧来の日本文化とどのように折衷・融合させ、近代日本の新しい文化を創造するかを模索していた大正から昭和初期にかけて、新舞踊の先駆的振付家として多くの舞踊作品を発表した榎茂都陸平の群舞作品について舞踊譜を解読し、音楽を伴う形で再現演舞するという従来にない方法により、90年近く前に日本とウィーンで上演された新形式の舞踊の身体技法やそれまでの日本にはない複雑で変化に富んだ群舞の実相を明らかにすることができた。併せて、複数の群舞作品の舞踊譜から、時代により変化する群舞の様相とそれらが社会的・文化的要因と関わっていたことを具体的に明らかにした点に本研究の学術的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the group dance works of Rikuhei Umemoto, who is recognized as a pioneer choreographer of "new dance" from the Taisho period to the early Showa period. "Sonata Appassionata" was one of his representative group dance works performed in Takarazuka Girls Opera and Vienna in 1931. In this study its dance notation score was deciphered with the cooperation of Umemoto dancers, and a reproduction performance accompanied by music was realized. As a result, it was possible to clarify how "group dance", an important element in the modernization of dance, was embodied on the actual work. In addition, by comparing with his other group dance works in different times, the influence of western dance and body movement culture acceptance and social situation changed on the dance technique and group dance choreography was also considered.

研究分野：人文学

キーワード：榎茂都陸平 新舞踊 舞踊譜 群舞 宝塚歌劇 ソナタ・アパッシヨナータ 集団性

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

大正期から昭和戦前期の日本の近代舞踊史において、榎茂都陸平の「新舞踊」が重要な意味を持っていることは先行研究によって知られている。渡辺(1999)は、当時の宝塚少女歌劇(以下、宝塚)が日本の新しい芸術のための実験舞台として機能し、その中で榎茂都が日本舞踊の近代化を目指すムーブメントの中心にいたと位置づけている。また國崎(2007)の研究による大正期宝塚歌劇の舞踊作品の調査においても榎茂都が当時最も先進的な舞踊を多く発表していたことが指摘されている。本研究の代表者である桑原は、これまでに榎茂都が遺した資料を整理し、その活動内容を明らかにするとともに、彼の舞踊作品を中心に舞踊史の観点から評価を試みてきた。また音楽研究者や日本舞踊家と協力し、日本の近代舞踊初期の実験的作品である『春から秋へ』(1921)について、舞踊譜に基づく作品の再現上演を実現し、その文化芸術的意義を実際の作品上に確認するという成果を残している(科学研究費補助金基盤研究(B)H21~H23年度、研究課題名:榎茂都陸平の舞踊譜と宝塚歌劇『春から秋へ』を中心に、代表:根岸一美、課題番号21320038)。この研究により近代の日本にふさわしい舞踊の創造を目指していた榎茂都が、西洋のオーケストラ音楽を用いて16人の舞踊手によるどのような群舞が創られたのかを目に見える形で明らかにすることができた。この作品の次に彼が熱心取り組んだのが有名な西洋音楽家による音楽を用いた一連の群舞の創作であり、その一つが1931年に宝塚と欧米舞踊視察中のウィーンで上演されたベートーベンのピアノソナタによる『ソナタ・アパッショナータ』であった。そして3年余に及ぶ欧米での視察から帰国した榎茂都は大人数の群舞作品を次々と発表し、その中で現在舞踊譜が遺されている作品の一つが、ムソルグスキーの音楽を用い48名が出演する群舞『裸山の一夜』である。

榎茂都における舞踊の近代化にとって最も重要なキーワードが「群舞」であったことは彼自身の発言にも繰り返されている通りである(榎茂都1958,1970)。しかし、その言葉の定義や作品上における具体的な方法、振付の特徴については特に明確にはされてこなかった。

### 参考文献

國崎彩:大正期の寶塚少女歌劇團の舞踊活動についての考察、演劇研究センター紀要 早稲田大学21世紀COEプログラム,2007、311-329

榎茂都陸平:舞踊への招待、全音楽譜出版社、1958

榎茂都陸平:新舞踊論、『日本の古典芸能』第6巻・舞踊、芸能誌史研究会編、平凡社、225-246

渡辺裕:宝塚歌劇の変容と日本近代、新書館、1999

### 2. 研究の目的

本研究は、身体を媒体とする舞踊表現について、集団によって踊られる「群舞」が、近代日本における西洋受容との関わりの中でどのように生れ、社会的・政治的な要因と関わって、その意味と実際の形がどのように変化していったのかを、大正期から昭和初期に、宝塚歌劇・松竹楽劇部・榎茂都舞踊協会を場として、芸術性の高い近代舞踊を数多く発表した榎茂都陸平(1897-1985)の作品に焦点を当てて考察するものである。

(1)「群舞」という言葉がいつ・どのような意味で使われるようになったのか、また榎茂都における群舞の概念を明らかにする。

(2)榎茂都の代表的な群舞作品について、舞踊譜に基づき、振付の特徴を実際の作品において明らかにする。

(3)大正期・昭和初期・戦前期のそれぞれの時期に上演された榎茂都の群舞作品について振付を比較し、当時の西洋舞踊や身体運動の受容、あるいは社会的・政治的背景が彼の群舞に及ぼした影響を考察する。

(4)昭和初期に日本が近代舞踊のモデルとしたドイツの「群舞」との比較を行う。

### 3. 研究の方法

(1)近代において「群舞」という言葉や概念がいつ・どのように生れ、その概念や方法がどのように変化していったのかを、文献資料に基づいて考察する。

(2)榎茂都陸平の群舞作品のうち、1931年に宝塚少女歌劇とウィーンで上演した『ソナタ・アパッショナータ』の舞踊譜について、榎茂都流舞踊家の協力を得て解読し、さらにその振付を舞踊手によって再現演舞することにより、群舞が実際の作品上にどのように具現化されていたのかを明らかにし、その特徴を考察する。

(3)すでに先行研究として舞踊譜の解読と再現演舞を行った『春から秋へ』(1921)の群舞と比較考察する。

(4)『ソナタ・アパッショナータ』と同じ1931年に宝塚とウィーンで上演、1936年に宝塚で再演した『裸山の一夜』の舞踊譜を解読し、群舞の振付の特徴を考察する。

(5)昭和戦前期に連続して創作された群舞作品『出埃及記』『タンホイザーの幻想』『蟻』『總力』の舞踊譜に基づいてこの時期の榎茂都の群舞の特徴を考察する。

(6) 1920-30 年代のドイツのノイエ・タンツの群舞映像を調査し、榎茂都の群舞と比較検討する。

#### 4. 研究成果

(1) 「群舞」は、一般に「大勢がむらがって踊ること。大勢の踊り手たちによる舞踏」(大辞林)と説明されている。本研究における文献調査では、この言葉が日本で見られるようになったのは1920年代初頭であり、具体的には、ヨーロッパでロシアン・バレエを見た市川猿之助や田中良が新しい舞踊の重要な要素として「群舞」に注目し、帰国後に群舞を用いた新舞踊『蟲』(1921)を発表した。またそれより半年以上早く榎茂都陸平が舞踊の近代化における「群舞」の重要性を主張して『春から秋へ』(1921)の中で群舞表現を用いた。榎茂都における「群舞」とは、「群衆の舞踊」の短縮語であるが、そこには従来の日本舞踊で舞踊手が揃って踊る振付ではなく、異なる動作をしながら一つの統一性をもった集団の表現力への気づきがあった。

(2) 1931年に宝塚少女歌劇とウィーンで上演された榎茂都陸平振付(ベートーベン作曲)『ソナタ・アパッショナータ』について、榎茂都流舞踊家の協力を得て、榎茂都直筆の舞踊譜を翻刻・解読し、さらに舞踊手により音楽を伴った形での再現演舞を行った。榎茂都による新舞踊の代表的群舞が、90年近くを経て、目に見える形で具現化できたことは舞踊史研究における極めて大きな成果である。舞踊譜の解読と『ソナタ・アパッショナータ』の再現演舞の分析から、振付の特徴として以下の点を明らかにした。

舞踊と音楽：舞踊動作は音楽(ピアノ・ソナタ No.23)の構造や音の特徴を捉えた振付であり、全体を通して両者は密接な関わりを持って進行している。第1楽章では、「節二合セ三歩進シナニ」あるいは「節二合セ次ノ位置ニテ向合」といった音楽を捉えた動作の指示が多く見られ。また動作を説明する文章の中に音符が挿入され、特定の音で行う動作が具体的に示されている箇所も多く見られるなど、一人ひとりの舞踊手が音楽を正確に捉えて動くことが求められる振付である。一方、第2楽章では具体的な音と動作を一致させる指示は少なく、1小節から数小節の音楽の中で舞踊手が相互に協調して、動作を合わせていくことが必要とされる箇所が多く見られる。

作品のテーマに関する榎茂都の発言は見当たらないが、舞踊譜に記された舞踊動作の分析から、彼が音楽の構造を理解したうえで、自身の音楽の解釈に基づいてテーマを設定していたことが推察できる。例えば、作品中で使われている動作の一つひとつは具体的な感情を表現しているとは言えないが、第1楽章では天(上)の方向を志向する動作「仰グ」「見上ゲル」「反身」が多く見られる一方、下方を志向する「俯向」「ウナダレル」「倒レル」「倒れ臥ス」といった対照的な動作もまた多く使われていることが指摘でき、前者は何か彼方にあるものを追い求める気持ちや心理を表現し、一方後者は、失意、寂しさ、諦め、悲しみ、不安といった感情を表現していると読み取ることができ、さらにこれらの動作が交互に組み合わせられていることから、この作品が相反する二つの感情の変化や起伏を表現していると推察できる。また動作の質を示す「静カニ」と「強ク」も繰り返し使われ、これらも作品全体のイメージに関わる重要な言葉と推察できる。

舞踊動作：第1楽章の音楽は、Allegro assai(アレグロ・アッサイ)、ヘ短調、12/8拍子で非常にテンポの早く、多くの舞踊動作が連続して現れるが、その中でも、「俯ク」動作が最も多く使われ、次いで「仰グ」や「見上ゲル」、さらに「ウナダレル」「手ヲ胸ニ当テル」「倒レル」「反身ニナル」「ハネ出ス」「指サス」が繰り返し使われていることが明らかになった。またAndante con moto(アンダンテ・コン・モート) 変ニ長調、2/4拍子でゆっくりとした穏やかな曲調の第2楽章では「拍手」「手拍子」「両手ツナギ」「両手合ス」「受け出ス」といった動作が多く使用され、第1楽章の動作とは明確な違いが見られる。また動作の質を表す言葉として「静カニ」が第一、第2楽章共に多く使われており、また第2楽章については「強ク」も多く見られることから、対立的な二つの質を意図した振付だったと考えられる。

群舞構成：人数構成が頻繁に変化し、また全体的に隊形変化の著しい振付である。それは、第1楽章で約10分間に人数構成と隊形が35回変化し、第2楽章では約7分弱の間に人数構成と隊形の変化は14回行われていることにも示されている。また人数構成の変化は、第1楽章では、8、7:1、6:2、5:3、5:2:1、4:4、4:3:1、4:2:2、3:2:2、2:2:2:2の10種類が見られ、8人で考え得る限りの組み合わせが使われている。テンポのゆっくりとした第2楽章では、8、7:1、6:2、4:4、4:2:2の5種類の組み合わせが見られる。隊形変化については、列(一列・二列・四列)、円(一重・二重)、四角、かたまり、渦巻きがあり、例えば列に関しては、横、縦、斜めの方向が使われている。それらの動作によって形作られる多様な隊形やポーズが大きな特徴となっていることがわかる。

(3) 『春から秋へ』(1921)と『ソナタ・アパッショナータ』(1931)の振付を比較することにより以下の点が明らかになった。

舞踊動作：『春から秋へ』においては、日本舞踊を主にバレエと舞楽風の動作が取り入れられていたが、『ソナタ・アパッショナータ』ではバレエや舞楽風の動作は使われず、また舞踊譜では動作の説明に日本舞踊の用語が使われているが、動作そのものはダルクローズやボーデといったヨーロッパの律動運動の影響が強く窺われるものである。

音楽：『春から秋へ』では宝塚所属の日本人音楽家が作曲したシンフォニーを用い、オリジナルのストーリーがある構成であった。しかしその後宝塚を離れた榎茂都は、松竹楽劇部や榎茂都舞踊協会では、有名な西洋音楽家の音楽を使用するようになり、『ソナタ・アパッショナータ』は楽聖と呼ばれるベートーベンの代表的なピアノ・ソナタによる作品であった。その背景には 10 年の間に輸入される音楽レコードの種類が大きく拡大したこと、作品ごとに音楽を作曲・編曲する音楽家の存在も影響していたと考えられる。

群舞：『春から秋へ』では、日本の新舞踊における最初の群舞という点で画期的であったが、全体としては主役である 2 人の場面が多くを占め、群舞は一部に使用されたのみだった。また舞踊手は同じ動作をすることが多く、群の隊形も円と列に限られていた。一方『ソナタ・アパッショナータ』では、8 名の舞踊手が最初から最後まで舞台上に存在し、しかも全員が同じ動作をする場面は限定的で、ほとんどは一人ひとりの舞踊手が異なる動作を行う。また舞踊手には固定した役割がなく、終始グループの構成は入れ替り、留まること無く変化し続ける複雑な振付であった。

(4)『ソナタ・アパッショナータ』と同じ 1931 年に宝塚で初演され、榎茂都が欧米視察から帰国した後の 1936 に再演された『裸山の一夜』は、48 名の舞踊手が登場する大群舞作品であり、当時世界の舞踊の中心と言われたドイツの新興舞踊の影響が窺われる作品である。その舞踊譜は、榎茂都の舞踊譜の中で唯一横書きであり、しかも音楽の楽譜が第 1 楽章 1 小節目から第 2 楽章の最終小節目まで総て記載され、その楽譜に沿って舞踊手の配置や舞踊動作が記述されている。この舞踊譜では、『春から秋へ』や『ソナタ・アパッショナータ』と違い、舞踊手一人ひとりの動作よりも集団の隊形や配置、変化の軌跡に重点が置かれていたことが明らかであった。

(5)昭和戦前期に創作された『出埃及記』(1935)、『タンホイザーの幻想』(1936)、『蟻』(1940)、『總力』(1941)は 50 人から 100 人が出演する群舞に特徴があり、その記譜では動作そのものに関する記述は限られ、群構成や位置の移動に関する記述がほとんどを占めている。換言すれば、個々の身体の動きよりも、集団性とそれが生み出すパワーに重点が置かれ、統制のとれた演舞と統一的な構成美を見せることに視点が置かれた振付であった。また作品のテーマには時代と社会の求める全体主義が反映されていた。

(6)ドイツのケルンにある Tanz Archive、ブレーメンの Tanz Film Institute、イギリス・サリー大学の National Resource Center for Dance において 1920-30 年代の群舞作品の映像を調査した結果、当時のダンスについては断片的な映像が複数遺されていることが明らかになった一方、動作や群舞構成の分析が可能な映像は現存せず、榎茂都の新舞踊との比較に適した資料を見つけることはできなかった。しかしそれにより改めて、映像として残すことができなかった時代における舞踊譜の意義と、それを実践した榎茂都の先見性が示されることになった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

(1) 桑原和美、榎茂都陸平の舞踊譜に見る《ソナタ・アパッショナータ(熱情奏鳴曲)》の振付、舞踊学会第 70 回大会、2018 年 12 月 8 日

(2) 桑原和美、榎茂都陸平振付《熱情奏鳴曲(ソナタ・アパッショナータ)》第 1 楽章について、舞踊学会第 69 回大会、2017 年 12 月 3 日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：  
ローマ字氏名：  
所属研究機関名：  
部局名：  
職名：  
研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。